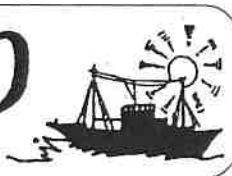


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

はやぶさ丸乗船実習の思い出

前田明夫

最終講義に、乗船したことのある練習船や研究船のスライドを使うことになった。はやぶさ丸以外の船の写真はそろったが、この船の写真が無い。はやぶさ丸は初めて海洋観測を経験した船であるので、そのスライドをどうしても使いたかった。インターネットを使って第五福竜丸で探さし、第五福竜丸展示館の存在を知った。ご迷惑かと思っただけ、展示館の方に趣旨を説明して写真の借用を依頼したところ、気持ちよく応じて下さった。インターネットでの探さは、第五福竜丸とははやぶさ丸に関する記憶を蘇らせてくれたばかりでなく、被爆者三三三の近の情報も教えてくれた。被爆者三三三の内すでに一名の方が亡くなられ、残りの方々が四五年間肉体的精神的苦痛に耐えながら生活している様子の日記を読んで、悲しみとあの時の水爆実験に対する憤りが再び蘇り、核兵器の存在に不安を感じた。

はやぶさ丸を最初に見たのは一九五七年だと思ふ。その頃、東京水産大学の岸壁に係留されていた真っ白な船体のはやぶさ丸は、周りがあまりにも殺風景であつたせいか、美しく見えた。木造船であるために、がたいの割には海面に浮いている部分が高く、喫水の浅い船であるという印象が残っている。この小さな船を、我々は「巨船はやぶさ丸」と愛称で呼んでいた。乗ってみて分かったことであるが、設備の悪い船であつた。四〇年余りも年月が経っているので記憶違いかも知れないが、乗船した時には、第五福竜丸を修理・改造した船である事を知らなかったと思う。このことを知ったのは、下船してからだいぶ後のような気がする。多分、噂で聞いたのであろう。

はやぶさ丸で海洋観測実習の指導をして下さった方は、私が最も尊敬していた先生であるが、すでに故人となつてしまつた。海洋物理学の研究に従事するようになったのは、この先生のお蔭である。実習で使つた観測機器は、いさづいて性能が悪く、人間が介入する部分が非常に多く、現在のものと比較すると雲泥の差がある。先生は、取り扱いは厄介な測器を手にしながら、測定の意味、測定原理などを懇切丁寧に説明して下さつた。

(以下三めんにつづく)

3・1ビキニ事件記念集会

三月三日
日本青年館

毎年協会の主催で行われている「3・1ビキニ記念集会」が、三月三日(土曜)午後二時から新宿区の本青年館の会議室で開かれ、市民、研究者、平和活動など、各界から三十余名が参加しました。



講演内容のあらましは藤田先生のご協力により二面から三面に掲載させていただきましたが、講演は具体的な問題提起にあふれ、参加者に感銘を与えるものとなりました。また、参加者からの質疑、発言もあり、講演の内容を深めました。記念講演に先立ち、主催者挨拶が川崎昭一郎協会会長から行われました。

を行いました。また理事会では、評議員会で選出された理事の互選により会長に川崎昭一郎氏、副会長に藤田秀雄氏が再任されました。協会理事・監事は次の各氏です。理事 川崎昭一郎(会長)、藤田秀雄(副会長)、小川岩雄、猿橋勝子、服部学、松井康浩、山村茂雄。監事 澤藤統一郎、清水幹雄。なお、理事会・評議員会では、四月新年度からの協会の職員人事の紹介もおこなわれました。

「近刊紹介」
『第五福竜丸とともに―被爆者から21世紀の君たちへ』
この本は元第五福竜丸乗組員の大石又七さんのお話をまとめた第一部と第五福竜丸展示館の案内を第二部とする読みやすい本です。大石さんのやさしい語り口で、被災当時のこと、乗組員の放射能とのたたかいと生活の不安など、巨大な水爆実験に遭遇させられた漁師の怒りと不安が率直に語られています。このようなことは再び繰り返されてはならないと核兵器の非道を語り、亡くなられた久保山さんをはじめとする、先輩や同僚を語る大石さんの想いが胸を打ちます。

第五福竜丸平和協会
理事会・評議員会開く
三月十七日午後五時三〇分から、東京・神田の学士会館で第五福竜丸平和協会の理事会・評議員会が開かれました。
二〇〇一年第一回評議員会では本年度の業務内容の報告、平成一三年度の事業計画、収支予算についての報告などが行われました。また、評議員会は、次期の理事・監事(任期二年)を選出しました。
第一四九回理事会では、平成一三年度事業計画及び収支予算を決定、次期評議員(任期二年)の選出

計報
岩垂 寿喜男さん
元環境庁長官、元社民党代議士の岩垂寿喜男さんが三月七日に亡くなられました。七一歳でした。岩垂さんは長野県松本市のご出身で旧総評の書記局長メンバー。六〇年安保闘争では安保改定阻止国民会議の事務局次長でした。
一九六八年の第五福竜丸保存委員会発足時には世話人として委員会の運営に当たられました。第五福竜丸平和協会では岩垂さんのご功績をしのびご冥福をお祈りする弔電をおくりました。

第二部では、展示館の展示に沿うように、ビキニ被災、乗組員の状況、マージナル諸島の人々の被災と生活、核保有国と核実験、核廃絶の世論の高揚などが紹介されています。
監修した川崎昭一郎協会会長が「読者のみなさんへ」と題した序文を寄せています。
A5版128ページ、定価1300円 新科学出版社刊

第五福竜丸の教育的意義

藤田秀雄

建造物としての第五福竜丸
 ここでいう「第五福竜丸の教育的意義」とは、木造船としての意義とビキニ事件で被災した船としての意義と展示館の意義とをふくみます。つまり、わたしは第五福竜丸の教育的意義を多面的にとらえようとしているのです。それは、このニュースの前々号で中野光さんがいっておられるように、「総合的学習」の場として展示館を、これまで以上に生かしていただきたいというねがいがあるからです。

さて、第五福竜丸は、展示館ができたあと生きています。展示館建設時は、ビキニ事件被災船としての第五福竜丸でした。これは変わらぬし、だからこそ、この展示館がつけられました。しかし、その後の年月のあいだに、この船は、いま日本ではつくられなくなつた木造船としての貴重な意味があります。この船は一九四七年、第七事代丸として建造されま

した。占領軍の造船規制があったのですが、当時の深刻な食糧難解決の一端をになうという意気込みをこめて、船大工の人たちがつくれたにちがいありません。こういう時代背景をふまえながら、どんな人たちが、いかに木造船建造の技術を学んでこの船をつくれたか、使用した木材はどうか、エンジンはのちのものと比べてどうかを学ぶことは、大切になっていくと思います。これが教育的意義の第一です。

まぐる漁船としての第五福竜丸を学ぶということが第二にありません。当時のええな漁業の方法を、乗組員の労働のきびしさとあわせて知ることです。わたしたちは、農業については、知ろうとすれば、かなり知ることができません。しかし漁業については、わからない。毎日食べているものについて知らないというのは、教育上の大きな欠陥であると思います。世界で最初の本格的な水爆実験被

災船としての第五福竜丸を学ぶことが第三です。原爆と水爆の相異、水爆のおそろべき威力、乗組員の闘病と演劇「漁船」に描かれた苦しみ、アメリカ側の態度と、日本の科学者のすぐれた努力がここに含まれます。大石又七さんが盲目の子どものために、この船の模型をつくったり、捨てられたまぐるを思いやって「まぐる塚」をつくった心は被災の苦しさをのりこえる努力から生まれたもののように思います。平和学習では、こういう人生の歩み（生き方）の学習を大切にすべきだと思っています。

同時に、一連の実験によって、八百隻以上の日本の船が被災船となりました。乗組員は一人以上です。その事実はまだ明かにされていません。高知県の高校生がやったように、その調査をするのも大切です。聞き読むだけの学習よりも、調査ははるかに創造的身につく学習です。

戦争と軍拡は最大の環境破壊
 ビキニ環礁のあるマーシャル諸島では、一九四六年から五八年までの間に、六七回の核実験がアメリカによっておこなわれました。被災のひどさは想像をこえていきます。多くの島民が死に、病気にをかされ、そして先祖代々住んできたところから、強制移住させられました。学ぶべきことの第四は、米・ロ・英・仏・中・インド・パキスタンの核実験が何をもたらしたかということです。

第五福竜丸展示館は、世界で唯一の核実験に関する展示館です。したがって、日本の被害だけを扱うわけにはいきません。全世界の核実験を知るとき、それがどれほど大きな環境破壊を生んできたかを知ることができません。自然破壊とか環境破壊が問題になり、「自然にやさしいエネルギー開発」から、ゴミの分別までが日常の話題になっていきます。しかし、戦争や核実験のような軍備拡大のためのいとなみこそが最大の環境破壊です。日本では平和問題と環境問題を別のものとして見るのが多い。しかし、グリーン運動とピースの運動は結びつかねばなら

ない。このことを最もよく示すのが第五福竜丸展示館です。

第五福竜丸は、日本と世界の反核兵器運動の記念碑でもあります。

一連のビキニ環礁での水爆実験で太平洋の大部分が汚染され、魚が食べられなくなりました。大気も汚染され放射能雨が降るようになりまし

た。これらとあわせて、水爆のおそろしさを知らされた日本人が反核兵器運動に立ちあがったのは当然でした。一九五四年三月二日に第五福竜丸が被ばくし、三月二四日に焼津港に帰港すると、焼津市議会では、同月二七日原子兵器禁止の決議をしま

した。このあと、国会や全国の自治体で同様の決議をし、東京都杉並区などで原水爆禁止署名運動がはじまり、八月には、同署名運動全国協議会が発足しました。翌年八月には、署名数は三二〇〇万に達します。(それより前、一九五〇年に原子兵器禁止のストックホルム・アピールがつけられ、日本も署名運動がおこなわれましたが、本格的な運動の展開は、ビキニ事件をおしてです。)

この動きのなかで、第一回原水爆禁止世界大会が開かれます。いわゆるラッセル・アインシュタイン声明が発表され(一九五五年七

月)、核兵器反対署名は、世界で六億七〇〇〇万となります。こういう運動が、日本の「非核三原則」を生み、世界の非核地帯を生み、三度目の核兵器使用を阻止したということが出来ます。

二〇〇〇年は、国連の定めた平和の文化国際年でした。二〇〇一年から二〇一〇年までは、平和の文化の一〇年(「世界の子どものための平和と非暴力の文化国際一〇年」)です。一九九九年九月国連総会で決議された「平和の文化に関する行動計画」では、第一六項の平和と安全のための行動として、全般的完全軍縮(軍備撤廃)を第一にあげ

ています。全般的完全軍縮の進行のなかで、世界の核兵器をなくしていくこととして読み取れます。そうであれば、日本国憲法を守る意義はますます大きくなっていくといえます。こういう国連等のよびかけもふまえながら、いまわたしたちはどうすべきかを考えるよりどころとして展示館を生かしていく必要があると考えます。

第五福竜丸保存運動も、ぜひ学びたい
 びつたえるべきことでしょう。この船は、一九六七年三月、廃船処分となり、夢の島という名のゴミ

の島に捨てられました。それを見つければ保存を訴える市民の声が聞こえ、新聞投書をした人もいました。これらを受けて美濃部亮吉、中野好夫、三宅泰雄ら八氏による保存の訴えが発表され、七六年六月に展示館がつけられました。しかしその間、この船を沈めてはならないと、何度もやってきて水をかき出す仕事をしつづけた人たちがいたことも忘れてはならないと思います。第五福竜丸の保存と展示館建設が、ひとつの平和運動の成果です。運動を伝えることによって新しい運動がおこります。

さいごに、これからおこりうる核事故を問題にしたいと思えます。これはアメリカの核アセスメント専門家ジャクソン・デービスの報告書のことです。彼は横須賀、呉、佐世保の軍港に出入りしているアメリカの原潜の事故(核弾頭事故と原発事故)のおこる可能性と被害について詳細な報告をしています。最小の原発事故で半径一〇〇〜一〇一〇キロの地域が汚染され、一〇万人以上が死ぬといわれています。そうならたらどうなるかを考え、わたしたちは行動しなければなりません。その時、

被害のイメージのひとつを与えてくれるのが第五福竜丸乗組員の人たちの経験です。南風の場合、横須賀港で事故がおければ、横浜・川崎・東京から、富士山周辺まで放射能が飛んできます。乗組員の人たちは、まず、めまい、吐き気、下痢が、二日目には体中が火ぶくれになり、一週間をすぎたころから髪の毛が抜けていきました。これとおなじことがおこるといってよいでしょう。このようなイメージが、問題解決への力を生みだすと思います。第五福竜丸の経験は、過去のものでありながら、今後生かされていくものとして学ぶことができます。

(一めんからつづく)

勝手に、思いを書き出して、『福竜丸だより』にそぐわない内容になってしまい、被爆した方々のご不幸を思うと、大変不謹慎な内容であると後悔している。ただ、不幸な船歴を持つ第五福竜丸が、私に良い経験をさせてくれた事は確かであり、そのことに感謝したのである。

(鹿児島大学教授)